

简 讯

- ◇ 9月24日（六）：北京外国语大学外事处组织全校专家秋游，吴咏梅陪同“中心”的专家及夫人游览了长城（八达岭）、定岭和神路。
- ◇ 9月26日（一）下午：社会研究室举行第2次研究会。伊藤贤次先生作了题为「战后日本高度成长的原因及日本式经营」的报告。
- ◇ 9月27日（二）下午：日本经济研究会和日本女性问题研究会分别在303、307教室开展了活动。伊藤贤次先生和藤原暹先生分别以「日本经济高度成长的原因」及「什么是女性学？」为题作了讲演。学生们和客座研究员都积极地参加了这两个研究会，讲演后还进行了热烈的答疑和讨论。
- ◇ 9月28日（三）晚7：00：中国国家外专局举办的外国专家国庆招待宴会（冷餐会）在友谊宾馆友谊宫隆重举行，“中心”的大多数专家及家属参加了宴会，度过了一个充满国际友好之情的夜晚。
- ◇ 9月29日（四）晚7：30：“中心”的专家及家属在保利大厦国际剧院观看了由外专局举办的东方歌舞团文艺晚会，欣赏了中国现代歌舞优美华丽的演出，体验了街头巷尾举国同庆国庆佳节的祥和欢乐气氛。
- ◇ 9月30日—10月5日：利用国庆休假，“中心”严安生主任和徐向东陪同专家去大同旅行，游览了五台山、云冈石窟等名胜古迹。通过五天时间的旅游，专家们加深了对中国传统文化的理解，同时也了解了地方城市和农村的情况。
- ◇ 10月6日（四）9：00：北京日本学研究中心第五次指导委员会在北京外国语大学办公楼三层会议室召开。参加会议的有中国国家教委外事司司长蒋妙瑞先生、日本国际交流基金常务理事草场宗春先生、日本驻华使馆公使桥本逸男先生、国家教委高教司代表王淑蓉女士、北京外国语大学副校长穆大英先生等。会议首先由“中心”严安生主任、北京大学现代日本研究班田万苍主任作一年来的运营工作报告，接着中日双方就基金的专家派遣计划、派遣专家去地方讲演、“中心”毕业生去向调查、课程设置修订案、“中心”的研

究室活动及今后的发展方向、“中心”的内部装修问题、派遣专家的宿舍问题、图书资料及教学设备的扩充更新问题、“中心”10周年纪念活动的构想等交换了意见。

◇10月7日（五）下午：日本国际交流基金中国特别事业班负责“中心”事项的代表高野佳男先生访问了“中心”。

◇10月10日（一）下午：第三次社会研究会召开，客座研究员李平发表了题为「中国的社会结构变化及与日本的比较」的论文。

◇10月11日（二）下午：日本经济研究会开展活动，伊藤贤次先生以「市场机构与混合经济」为题作了报告。

下午1：30：10周年纪念活动准备委员会召开第一次会议，讨论了十周年纪年研讨会召开的时间、期限、主题、计划内容、预算、今后的主要日程等。

◇10月15日（六）～16日（日）：“中心”中方的全体教职工利用休息日进行了郊游，游玩了北京郊外的名胜潭柘寺、戒坛寺和石花洞。

◇10月19日（三）下午：文学·文化研究会开展第二次活动，徐滔和冯红霞分别发表了「明治以后的阳明学观与大盐中斋」、「〈伊豆舞女〉考」的论文。

◇10月24日（一）下午：第四次社会研究会举行，伊藤贤次先生以「市场机制与政府的作用」为题作了报告。

## 难忘的焰火晚会

徐一平

十月一日傍晚六点多钟，没去大同、太原旅行的十几位专家又聚在了友谊宾馆的大院里。尽管上午大家已经去过了颐和园—“十·一游园会”，但一个个还是那么精神饱满、兴致勃勃。因为大家要一起乘车去天安门广场观礼台观看“十·一”的焰火晚会。

当我们到达天安门广场后，不一会儿，北京市市长李其炎在天安门城楼上宣布晚会开始。鸣过礼炮、奏过国歌后，天空中绽开了五彩缤纷的礼花。特别是那第一炮，一片火红的花朵突然在空中开放，把本来就装点得五光十色的天安门广场映得通亮。紧接着，一朵又一朵的花儿不断腾空而起，有的象牡丹，有的象菊花，有的象雪莲……那美丽壮观的夜空真是难以用笔墨来描绘。

竹内实主任教授说，这是他在中国渡过的最美好的一个夜晚；小岛先生说，在日本也看过礼花，但今天晚上把这一辈子的焰火都看够了；专家们有的举起相机，有的举起摄影机，都想把这一奇景拍下来带给家人欣赏。不光大人，孩子也显得异常兴奋，山口先生的大儿子尽管白天已玩得很累，在来天安门广场的车中已有倦意，但当他看到满天的礼花时，乐得又蹦又跳。尤其令人高兴的是：不光在观礼台上，去大同、太原旅行的专家们也在电视上观看了焰火，连专家们在日本的家人们也通过卫星电视看到了晚会的盛况。并立即打来越洋长途，

告诉专家“我在电视里看到了你们”。总之，“十·一”夜的焰火晚会给我们每个人都留下了不可磨灭的美好印象。

## 公开讲座之感想

潘郁红

为了开拓知识面，但凡看到公开讲座中有自己喜欢的题目就去听。比如这个月来，我听了小野先生的「中国起源汉语在日语中的变化—以“元气”“天气”“风情”等为例」、今井先生的「战时下日本的日中战争论（1936-41）、延广先生的「从“余裕”看到的江户时代」等讲座。说起感受呢，我觉得各位老师都认真地准备了讲座内容这一点，很值得佩服。另外我也对老师们尽可能地用浅显易懂的语言进行生动有趣的讲演表示感谢。总之，我觉得通过听讲座，不光可以拓宽知识面，还有助于提高听力。

孙建国

至今为止公开讲座已经举行了五次，我只漏听了一回。对于新生的我来说，公开讲座可算是件新鲜事。第一次公开讲座时我是边琢磨着“究竟是什么样的？”，边走进教室的。每次听完讲座，我都对先生们渊博的学识油然而敬。我一味地听，以至于忘了自己该思考些什么。我想今后要更冷静地去听讲座，独立地思考，因为听了以后好好思考才能对学习有所帮助。

## 日本佛教与饮食之探源

—云冈石窟与圣地五台山之旅：五宿六天（9/30晚~10/5晨）—

伊藤贤次

按惯例今年“中心”也组织了国庆节旅行，前往大同、五台山，盘亘了五宿六天，“中心”成员16人（日本人包含家属在内是14人，加上严安生主任和徐向东）与友好旅行社的小贾共17人参加了旅行。从北京到大同来回都是坐软卧，深夜出发早晨到，所以实际游玩时间为四天。从大同车站开始全程租用旅游专车转了四天。在大同游了云冈石窟，逛了寺庙，住了一夜。后来从大同到五台山是沿线观光，加上五台山逛寺庙，在五台山共住了两晚上。这三夜都是住的当地一流的饭店（虽有一部分存在疑问）。

由于去之前没有好好学习，所以有人一直在想象大同除了挖煤、五台山除了爬山外就没有什么了（不瞒您说，那就是我。）。可是在参观了云冈石窟、华严寺、善化寺、九龙壁等这些具有1500年以上历史的北魏时代的佛教遗址后，被其壮大及优美所感服，想法一下子就改变了。及至我们穿越了高达2~3000米的恒山山脉，来到佛教胜地五台山，领略

了与大同遗迹同代建造起来的一系列伽蓝和佛像后，我了解到了佛教传入日本的源流，同时也再次为古人们传播佛教的热情和艰辛劳苦而感慨万千。

现列举参观过的寺庙以供参考：应县的木塔寺、五台山的菩萨顶、显通寺、塔院寺、龙泉寺、殊像寺、盘若泉、南山寺及浑源县的悬空寺。虽说自己已觉得逛得够多的了，可还是有那么一丝“可能的话还想去五台山著名的南禅寺和佛光寺”的想法（我知道周围的人对我的评价是“怎么到了这儿，一下子装作佛教通了！”）。

大同到五台山途中的景观也给我留下了深刻的印象。连绵起伏的群山和广阔的平原一望无际，虽然梯田一直开垦至临近山顶的地方，但远眺大致呈淡茶色，显得很荒凉。可能也是因为十月份的缘故吧，最主要的还是因为没长树。可能也有岩石瓦砾多的原因，但我觉得最大的原因大概还是降水量不足。而且住宅也都是土造建筑。我强烈地感受到降水量对生活影响的巨大。

整整四天从早上起床到晚上睡觉，17个人（加上导游、司机共19人）都统一行动，随着同游日深，整个团体形成了「大同·五台山巡游大家庭」的气氛，个性各异、智慧多彩的男女老幼组成了一个国际团结、欢笑畅谈的家庭集体。

途中不乏小插曲（详情可直接向参加者个别请教）。预想中没有料到的事情，反而成了很好的回忆：礼品铺子老板苦涩的脸（←我们什么都没买）、当地孩子们的笑脸、单程4~50分钟的徒步行走、淘金、路上脱谷、每晚的酒会、雪景、五台山导游骚动（咨询情况）、当地名菜粉饼料理、活佛来临的消息、108阶的梯子、对菩萨和罗汉的攻击、骑马照相、龙泉井之真伪论争、名导游（G,H,N,Y）、国际卡拉OK大交流、窑洞（石窟生活）、悬崖边的恐惧、司机的途中下车买瓶罐、涮羊肉等等。

带着一帘回味，在软卧摇篮的颠簸下，我们全体人员于五日早晨平安地回到了北京。初次出京，深切地感受到了中国国土的辽阔和地方特点。

最后对路上照料我们的各位表示深深的感谢。

# センター通信

(第41号)

責任編集：清水展 吳咏梅

郵便番号：100081

Tel：8424893

1994, 10, 25

## ニュース

- ◇9月24日(土)：北京外国語大学外事処主催で秋の遠足が行われた。吳咏梅さんが専家の先生方とご家族にお供して、万里の長城と明の十三陵(定陵)、神路を見学した。
- ◇9月26日(月)午後：社会研究室は第2回目の研究会を開催した。伊藤賢次先生が「戦後日本の高度成長の要因と「日本的」経営について」というテーマで発表した。
- ◇9月27日(火)午後：日本経済研究会と日本女性問題研究会がそれぞれ303と307教室で活動を行った。伊藤賢次先生が「日本の高度成長の要因について」、藤原暹先生が「女性学とは？」と題する講演をそれぞれ行った。両会とも大学院生および客員研究員が多数参加し、講演後に熱心な質疑応答が交わされた。
- ◇9月28日(水)夜7:00：中国国家外国専門家局主催の外国専門家国慶節招待宴会(バイキング)が、友誼賓館の友誼宮にて盛大に行われた。センターの専家の先生方およびご家族が大多数それに参加し、国際友好の楽しい一時を過ごした。
- ◇9月29日(木)夜7:30：国家外国専門家局主催、東方歌舞団演出の歌舞鑑賞会が保利大厦国際劇場で開催された。派遣教授の先生とそのご家族は、国慶節祝賀の華やかな街の雰囲気と現代歌舞の華麗な美しさを満喫した。
- ◇9月30日～10月5日：10月1日から4日の国慶節休暇を利用して、センターは派遣専家の雲岡石窟見学と五台山仏教寺院参観のための大同旅行を組織し、嚴安生主任と徐向東さんが同行した。5日間の見聞によって、中国伝統文化への理解を深めるとともに地方都市、農村の様子を知ることができた。
- ◇10月6日(木)9:00：北京日本学研究中心第5次運営審議委員会が北京外国語大学事務ビルの3階会議室にて開かれた。会議に出席したのは、蔣妙瑞中国国家教育委員会外事司司長、草場宗春日本国際交流基金常務理事、橋本逸男日本在中国大使館公使、王淑蓉中国国家教育委員会高教司代表、穆大英北京外国語大学副学長などの方々である。まず、北京日本学研究中心の嚴安生主任、北京大学現代日本研究コースの田万蒼主任からこの1年間の運営報告がなされ、続いて基金の専家派遣計画、派遣教授の地方講演、センター卒業生の就職先についての調査、カリキュラム改訂案、センターの研究室活動および今後の発展方向、センターの内装工事、派遣教授の宿舎の問題、図書資料および教学設備の拡充更新問題、センターの10周年記念活動などの構想をめぐって中日双方の意見を交換した。
- ◇10月7日(金)午後：国際交流基金中国特別事業班センター担当の代表高野佳男先生がセンターを訪問した。
- ◇10月10日(月)午後：第3回目の社会研究会が開かれ、客員研究員の李平さんが「中国の社会構造変化と日本との比較」というテーマで報告をした。

◇10月11日（火）午後：経済研究会が開かれ、伊藤賢治先生が「市場機構と混合経済」というテーマで興味深い講演をされた。

午後1：30：10周年記念準備委員会第1回会議が開かれ、10周年記念シンポジウムの開催時期と期間、テーマ、企画内容、予算編成、今後の主なスケジュール等について議論をした。

◇10月15日（土）～16日（日）：センター中国側の全職員が休暇を利用して、北京郊外の名勝地潭拓寺、戒壇寺、石花洞などを見学した。

◇10月19日（水）午後：第2回目の文学・文化研究会が開かれ、徐滔先生と馮紅霞先生が、それぞれ「明治以後の陽明学観と大塩中斎」、「伊豆の踊り子考」というテーマで報告をした。

◇10月24日（月）午後：第4回目の社会研究会が開かれ、伊藤賢次先生が「市場メカニズムと政府の役割」というテーマで報告をした。

## 忘れられない花火大会

徐 一平

10月1日の夕方6時、大同～太原旅行に参加しなかった十数人の専門家たちが、友誼賓館のバス乗場に集まって来た。午前中に頤和園で催された「10・1（国慶節）」遊園会に行ってきたにもかかわらず、皆は元気一杯、興味満々であった。これからバスで天安門広場に行き、特別観覧席で「10・1」花火大会を楽しむからである。

天安門についてから間もなく、北京市市長の李其炎が、天安門の上で祝賀の夕べの開催を宣言した。礼砲を打ち鳴らし、国歌を演奏したあと、色とりどりのあざやかな花火が打ち上げられ、空一杯に広がった。とりわけ最初に上がった花火は、暗闇のなかに突如として真っ赤な花模様を描き出し、美しく飾りたてられた天安門広場を明るく照らし出した。次から次へと息つく間もなく大輪の花火が空へ舞い上がり、あるものは牡丹のように、あるものは菊のように、そしてあるものは福寿草のようであった。その美しく壮観な様は、とうてい言葉では表現できないものであった。

主任教授の竹内実先生は、これは自分が中国で過ごした一番素晴らしい一夜である、とおっしゃった。小島先生は、今まで日本で見た花火を全部合わせたぐらいの量の花火を今夜いっぱいに見ることができた、とおっしゃった。専家の先生方は、皆カメラやビデオでこの様子を撮影をしており、家族にも見せてまた一緒に楽しむのでしょうか。大人ばかりでなく、子供達もとても興奮したようでした。山口先生の息子さんは、昼間の遊び疲れで、天安門に来る車のなかでは眠そうにしていたのに、満天の花火を目にすると、とたんに楽しくなって、はしゃぎまわっていた。

観覧席にいた専家だけではなく、大同～太原旅行へ行った専家たちも、テレビの実況放送でこの花火大会を見たそうです。さらには日本にいる専家の家族のなかにも、衛星放送の特別番組で花火大会の盛況を中継する画面のなかに専家たちの姿が映しだされるのを見

て、さっそく国際電話をかけてきた方もいるそうです。こうして「10・1」花火大会の夜は、私たち一人ひとりの心に、忘れることのできない美しい印象を残してくれたのです。

## 公開講座を聴いて

潘 郁紅

知識を広めるために、私は自分の好きなテーマをみると、その講座の内容を聴きに行くことにしています。たとえば、この1カ月、私は小野先生の「中国出自漢語の日本語における変容」、今井先生の「戦時下日本の中国論 1936～1941」、延広先生の「"ゆとり"からみた江戸時代」などの講座をお聴きしました。これらの講座から得た感じでは、先生方がまじめに講座の内容を準備してくださっていることに、たいへん敬服しました。それに、先生方がなるべくやさしい言葉でおもしろい話をしてくださったことにも感謝いたします。何はともあれ、講座を聴くことによって、知識を広めるとともに、自分の聴力の向上にも役立つ手段だと思えます。

孫 建国

今まで5回にわたる公開講座を、1回だけ漏らして聴いてきました。新入りの私にとって、公開講座とはむしろ新鮮な物事でした。いったい何なんだろう、と思いながら、私は初めての公開講座の教室に入ったのです。

さすがに、と、先生方のお話を聴いたその都度、私はその深く博き才学に感服せざるを得なかったのです。自分の頭で考えることを忘れんばかりに、これからはもっと冷静に公開講座を聴いていきたいとおもいます。聴いて考えてこそ、勉強になるものだと思うからです。

## 日本仏教と食の源流を探る

—雲崗石窟と聖地五台山の旅：5日6泊の国慶節旅行（9／30夜～10／5朝）—

伊藤 賢次

今年の恒例の国慶節旅行は、大同と五台山の5泊6日であり、センターのメンバー16人（日本人は家族を含めて14人、それに巖安生先生と徐向東さん）と友好旅行社の賈さんの合計17名で行われた。北京から大同までは行き帰りとも夜行寝台車で、深夜出発の早朝帰りであり、実質ほぼ4日間の旅であった。大同駅からはすべて専用貸し切りバスで回る4日間であった。大同では雲崗石窟とお寺巡りをして1泊、後は大同から五台山までの沿線見学と五台山の寺巡りを含めて五台山での2泊、合計3泊はそれぞれの地における一流ホテル（一部疑問視する向きもあり）での宿泊であった。

行くまでは不勉強のせいで、大同の石炭堀りと五台山の山登り程度を想像していた人もいたが（何を隠そう、実は私のこと）、大同での雲崗石窟と華嚴寺、善化寺、九龍壁など

1,500年以上前の北魏時代からの仏教遺跡の壮大さと素晴らしさを見てその考えが一変した。さらに、2~3,000m級の恒山山脈を縫って仏教聖地五台山に入り、大同の遺跡と同時代の昔から建立された一連の伽藍や仏像に接するにおよび、日本への仏教伝来のルーツを知るとともに、あらためて仏教布教に対する古代の人々の熱情と苦勞に感慨を持つに至った。

参考までに訪れた寺を挙げておくと；応県の木塔寺，五台山では菩薩頂，顯通寺，塔院寺，龍泉寺，殊像寺，盤若の泉，南山寺，それに渾源県の懸空寺です。よくもこんなに沢山回ったとも思いますが，できれば五台山で有名な南禪寺，仏光寺にも行きたかったとの一抹の思いもあります（「行ってから急に仏教通ぶって！」という私に対する外野席の声を十分に承知しておりますが）。

また大同から五台山への道中の景観も強く印象づけられた。大きな山々や平原が雄大に広がり，山の頂き近くまでよく開墾され畑となっていたが，眺めがほぼ薄茶色一色で，荒涼に映ったことである。10月という季節もあったかもしれないが，何より木々が育っていない。岩や瓦礫が多いせいもあるだろうが，恐らくは水不足が最大の原因と思われた。おまけに家々も土主体の作りであり，生活に対する降雨量の影響の大きさを強く感じた。

とにかく丸4日間，朝昼晩，起床から就寝まで17人（ガイドと運転手を入れると合計19人）がほぼ同一行動をとるので，日を重ねるにつれ，一同「大同・五台山巡礼の大家族」といった雰囲気となり，個性と知性豊かな老若男女？の国際団結談笑家族集団となった。

道中のエピソードにはこと欠かない（詳細は参加者より個別直接にお聞き乞う）。予定にないことが，かえって良い思い出となっている；みやげ物屋の渋顔（←ちっとも買わない），地元の子供の笑顔，片道4~50分の徒歩行進，金掘り，路上脱穀，毎夜の酒盛り，雪景色，五大山ガイド騒動（やりとり），地元名産粉餅料理，活仏様ご来場情報，108段の階段，菩薩と羅漢攻め，馬のおしつけ，龍泉の井の真偽論争，名ガイド（G,H,N,Yほか）国際カラオケ交流，ヤオトン（石窟住居），断崖際の恐怖，運転手の途中下車瓶買い，羊のしゃぶしゃぶ鍋，等々。

思い出一杯，軟臥に揺られ，5日早朝，全員故郷北京に無事戻る。北京から初めて出てみて，中国の国土の大きさと地域の特徴を実感。

この旅行をお世話していただいた方々に深くお礼申し上げます。